



“嵐の前の静けさにさようなら”

英語学科長 吉田 研作

サバティカルとは恐ろしいものです。その間に自分の手の届かないところで何が起こるか分からないからです。昨年12月までは家族共々、上智のことも忘れてアメリカ生活にどっぷり浸っていました。ところが1枚のFAXのために、日本の厳しく「忙しい」現実へと無理矢理引き戻される思いがしました。英語学科長に選ばれたというのです。

ところで一昨年、本学の卒業生にアンケート調査を行ないましたが、その結果、卒業生の約4割がほぼ毎日仕事で英語を使い、その内の約半数がオール・コミュニケーションに使っていることがわかりました。20年前に繰り広げられた「英語大論争」時の、当時衆議院議員だった平泉氏の意見は、日本人の5%が英語でオール・コミュニケーションできたら、日本は国際社会で生きて行けるとのことでしたが、本校の卒業生に関する限り、その数を遙かに上回っていることがわかります。

しかし英語を国際的なコミュニケーションの手段に使うには、「言語」としての形だけでなく、内容が伴わなければなりません。そして今後の英語学科は、今まで以上に内容を重視した英語教育を行なう必要があると思います。加えてその内容も、他では学べることの焼き直しではなく、英語学科だからこそ与えられる、独自のものであってほしいと思います。BTF講座は正にそれにふさわしい課目の一つでしょう。ただ問題があるとすれば、BTFも英語で行なってこそ、真の英語学科の科目と言えるのではないのでしょうか。

これからの2年間、卒業生の皆様と英語学科をさらに素晴らしい学科へと発展させていくことができるよう、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

本年度総会をオール・ソフィアンズ・デー～5月29日(日)に開催

松尾先生、吉田先生の講演もある賑やかなパーティーにぜひお越しください。

今年も1994年度SELDA総会を、来る5月29日(日)、オール・ソフィアンズ・デーに開催いたします。総会としての議題は20分位で終了、その後はこの4月1日より新しく英語学科長に就任された吉田研作先生と、この度学事部長の職を離任されて1年のサバティカルに入られた松尾式之先生に、最近の大学事情や学生気質についてお話を伺います。ワインとオードブルを楽しみながらの気やかなパーティーですので、ぜひお友達やご家族も誘って、若葉の薫るキャンパスにお出かけください。懐かしいあの友、この友に久しぶりにお会いになりませんか。

- 日程 5月29日(日)
- 時間 午後1:30より
- 場所 7号館12階 第6会議室
- 会費 お一人 1000円

1993年度BTF秋期講座報告

実社会で活躍している英語学科卒業生の方が講師となり、「英語と社会」というテーマで、現役英語学科生に講義をするというユニークな授業です。以下、秋期の講師の方々の横顔と講義の内容を要約します。

10月8日

田井祐子氏(昭和57年卒) 博報堂勤務



広告代理店(株)博報堂にて広告の仕事に携わる田井氏。第一営業局で外資系クライアントを担当、広告担当者の窓口となり、柔軟仕上げ剤「ファーファ」のネーミングに関わったこと。また異動後、国際業務局媒体部にて日本企業の海外での広告活動をサポートしていることなど、その仕事内容について具体的に話して下さった。

広告の出来次第で「博報堂」の評価が浮き沈みするため、最大の努力を重ねてきたという彼女。交渉相手の80%がnative以外なので、英語の流暢さよりも明快さが問われ、一つのチームとしてうまく仕事ができることが肝心だと学んだというのが印象的だった。

10月15日

田中耕太郎氏(昭和53年卒) 創隆社勤務



田中氏は15年間出版業界で活躍、現在も編集長を務めている。今回は本というメディアについて、広く社会を把握した視点から講義をしていただいた。

情報を紙に印刷して売るということは、手間もコストもかかるし、テレビに比べて間接的な伝達となる。あらゆる情報が無制限に氾濫する現代、何を選んで読むのかという選択が、出版する側と読み手の両方に求められる。

田中氏の言う「心のダイエット」の言葉のごとく、慌ただしい生活の中で本を読む際、ささやかな心の贅沢を感じられればと思った学生もいたようだ。

10月22日・29日

小林修氏(昭和40年 St.Norbert大学卒) エンファンス社長



小林氏は英語学科からSt.Norbert大学へ留学し、同大を卒業。上智大は中退となったが、国際広告会社を設立し、今なお一線で活躍されている。また英語学科同窓会の副会長として、このBTF講座にも御尽力をいただいている。

今回、小林氏は昨今の不況における日本企業の長期的展望、そして英語学科生が社会に出るにあたっての心構えについて豊富な経験を基に話された。また30年間のビジネスパーソンとしての経験に基づいた最も重要な10のキーワードを提示。一経営者としての観点が、これから社会へ出る学生の興味を強く引いていた。

11月12日

今野(川村)由紀子氏(昭和46年卒) 翻訳家



卒業後、桜蔭学園で教職を3年間経験し、ブリガムヤング大学へ留学。帰国後、翻訳業をライフワークに決めた今野氏。

翻訳という仕事は単に英語ができるだけでなく、他分野にわたる知識を必要とし、また翻訳は英文解釈の能力に加え、日本語表現の豊かさを必要とする。また外国人と同じくらい質の高いものを求められるため、この仕事は考えていたよりも困難と実感したという。仕事の中で、何事もチャレンジ精神と努力が一番大切と学んだ彼女の経験談は、多くの学生に自分の夢の大事さを教えたようだ。

11月19日

長野智子氏(昭和60年卒) 元フジテレビアナウンサー



自分捜しの大学4年間。様々なバイトを経験した中で、ラジオのバイトがきっかけとなり、マスコミに興味を感じる。そしてフジテレビの厳しい入社試験を突破。入社後、日航機墜落事故の報道をひとつのきっかけとし、報道を志望した。しかし、きた仕事はバラエティ。悩みはしたが「ひょうきん族」を引き受ける。結果的に長野氏の代表作になった。……そんな仕事の経緯を気持ちを含めて、話して下さった長野氏。

結婚後、フリーとなり、時間的なゆとりもできて、仕事の楽しさを感じているらしい。「続けることが才能」という先輩からの助言を座右の銘に、頑張る姿が印象に残った。



11月26日

武藤多美氏(昭和46年卒) American Field Service事務局長

武藤氏は1965年7月にボランティアとして高校生の留学援助を支援する国際団体……エイ・エフ・エスの奨学生としてプリンストン・ハイスクールに留学し、帰国後、上智大学英語学科に入学。在学中にボランティアとして活動に参加。卒業後、エイ・エフ・エスに就職し1980年から事務局長兼プログラム本部長として活躍されている。

武藤氏は、ボランティアとは人の為というより自分自身の為にすることであり、職場は、学校では学ぶことのできないことを学ぶ場所であると言う。この話から、武藤氏が真剣に活動に取り組む様子が伝わってきた。



12月10日

鈴木由美子氏(昭和62年卒) 日本経済新聞社勤務

現在、日本経済新聞社の編集局、映像ニュース部で、株価ニュースのアナウンサーを務める鈴木氏。入社当時は経済解説部に所属し、自分の知識の浅さを痛感したという。また2年後、証券部に異動、同期と楽しく仕事ができた反面、他誌との競争による緊張感や不規則な生活に苦労されたと話された。

それでもこの仕事を続けてきた理由として、人に会うのが好きなこと、毎日様々な新体験ができること、特ダネを書く快感、取材をし自分しか知らない事実をどう紙面に表現するか考える喜びを挙げられた。今後も新聞記者を長く続けたいと意欲的な話だった。



12月17日

石原雅子氏(昭和58年卒) マッキンゼー・アンド・カンパニー勤務

“Never Too Late to Learn”と題された石原氏の講義は、外資系企業に勤務、国際結婚、仕事を持ちながらの出産を経験した方の話を聞きたいという女子学生からの強い要望から実現したもので、非常に関心が高かった。大学を出ても仕事に必要な能力は持っていないのだから、どんな仕事からでも入っていくべきだ。数年たって壁に当たったら、もう一度、自分の「太平洋」を探してほしいと、石原氏は語られた。

また講義後、いつもとは逆に石原氏から学生に、勉強や就職について質問があった。人を採用する立場からの発言に、就職活動を控えた学生たちは真剣に耳を傾けていた。



1月7日

浜野孝氏(昭和39年卒) JTBワールド勤務

講義はまず、仕事と趣味という点から始められた。旅行が好きでJTBに入社したことを、ある意味では後悔している。趣味と仕事は全く違うものであって、旅行が好きだから旅行業を希望するのは、理由にならないと浜野氏は話された。

そして1964年に海外旅行が自由化されてからの旅行者数の推移を、日本を取り巻く世界状況と関連づけて説明された。これからは異文化に触れるという意味で、アラブイスラム文化が脚光を浴びるのではないかとのこと。最後にアフリカの砂漠に緑を作る旅行を組織するというご自身の夢を披露、今の仕事は夢の実現手段だと締めくくられた。

〈SELNET一時休止のお知らせ〉

SELNETは英語学科卒業生のための人材バンクサービスとして2年半前にスタートしましたが、景気の低迷により求人の申し込みが大変少なくなり、人材バンクとしての十分なサービスが提供できない状況になりました。残念ですが、一時休止いたします。94年2月末日現在、求人求職の登録有効期限が残っている会員の皆様には、登録料をご返却いたします。今日までSELNETをご支援、ご利用いただいた会員の皆様に心より御礼申し上げます。

「ニューヨークより」



ケンウッドU.S.A.
副社長兼ニュージャージー支店長
手塚正明（昭和43年卒）

自己紹介になりますが、卒業して現在のケンウッド(オーディオメーカー)に務めて25年になります。これまで海外畑一筋で来ており、フィリピンに1年、ドイツに半年、ベルギーに4年半、スウェーデンに3年半、そして米国駐在となり、米国販売会社の副社長兼NY支店長として9年を迎えています。東南アジア諸国を3年駆け回り、ヨーロッパ諸国の人々と苦楽を共にし、今、米国人従業員を使って会社の経営に携わっています。

どこの国に行っても共通に感じたことは、人種や顔が異なっても人間の本質は同じである、ということです。即ち、誠意は通じますし、常に相手の立場と利益を考慮して合意を成立させることが大事です。また営利活動だけでなく、常に親善大使の意識を持って地域社会の貢献活動に参加することも重要なことです。私は会社の代表として、また個人として種々のコミュニティ活動に参加しています。

今は米国生活が長くなり、米国より日本を眺めています、特に日本の政治の非近代性を痛感します。一国の総理(田中)、副総理(金丸)の逮捕に始まり、名だたる国会議員や企業のトップの収賄罪による逮捕は政治がいかに墮落したかを物語っています。やはり国民を代表する政治家には、国のため、国民のために働く公僕の本質を持ってもらいたいと思います。第二に勤勉な日本国民が、本当の意味で生活内容の向上を享受できて、国際的にも共鳴してもらえるようなビジョンを持ってもらいたいものです。米国の歴代大統領は常にVISIONを掲げ、国民を吹舞してきました。中でも故ケネディ大統領の理想に燃えた数々のスピーチは、多くの若者に「国のために自分は何ができるのか」を考えさせ、米国の隆盛期を創り出しました。若きクリントン大統領も故ケネディ大統領の理念、理想に強く刺激を受けた一人です。

日本の腐敗した政治に必要なのは、将来の理念を具体的に国民に示し、それを実行できる強いリーダーシップです。この意味で、長年の悪癖を破り、日本に真の改革をもたらそうとして旗を揚げたのが細川首相です。今こそ、真に国のため、国民のために奉仕できる政治家を選ぶことの重大性を認識すべき時です。

(平成6年3月中旬にご寄稿いただきました。)

会員名簿 来春発刊!!
異動通知にご協力
ください!

3年毎に発行される本会の会員名簿は、来春3月、平成6年度版を発刊する予定です。現在、正確な情報を掲載すべく準備を進めていますので、住所変更・勤務先変更・改姓等の異動が生じた際には、同窓会宛にお知らせください。卒業年と会員番号(宛名ラベルの上の番号)を書き添えてくださると、処理がはかどります。

『翻訳』と『点訳』



和田翻訳室 代表取締役
和田恵子（昭和47年卒）

早いもので上智大学に入学して四半世紀、翻訳の仕事始めて20年になろうとしています。

ニッセル神父様のご紹介で、外資系の船会社に就職して以来、結婚や夫婦でのフランス留学をはさみましたが、薬品会社、銀行といずれも外資系で8年ほど秘書を務めました。その間に学んだ実務が、産業翻訳の基礎になったと思います。翻訳者として独立した当初は、まさにバブル景気突入の頃でしたので、分野の異なる仕事を常時数本抱えるといった状態でした。様々な分野の仕事を数多くこなす時期を経て、力を蓄えることができたと思います。貴重な経験でした。翻訳会社の設立は、逆にバブル経済の破綻の時でしたので、今は経営者として大いに試練を受けています。

英語点字講習会に参加したのがきっかけで、'87年から「ルイ」という英語の点訳グループに入りました。当初の点訳は手作業でしたが、今はパソコン入力での点訳作業が中心です。このサークルでは単に点訳だけではなく、点字の最先端技術や海外点字文献の研究、またサークルの活動の本質について考え合うなど、単なる盲人のお手伝いとしてのボランティアではない活動を目指しています。私自身は、現在は仕事が忙しいので点訳活動はしていませんが、海外との連絡、点字に関連した翻訳などを担当しています。翻訳、点訳のいずれにおいても、質の高い「訳」を提供したいと願っています。

「英語教育に関する社会調査を実施して」

英語学科教授 松尾式之

〈調査発足の経緯〉

今から3年前、英語学科の有志の教員たちの発案により、英語教育に関しての研究を行なうことになりました。英語教育の問題点を探るとともに、何かの新しい方法を考えたいというのがその希望でした。それは時代の流れが大きく変わろうとしていることを、教員たちが考えるようになったせいかもしれません。ちょうどその頃、東京大学の教員たちが、全く新しい形の英語教科書を作成したからです。（The Universe of English）大学当局は私たちの希望を受け入れ、年間150万円ばかりの予算をつけてくれました。ここに、3年間に及ぶ「学内共同研究」が発足しました。

英語教育に関する社会調査とカリキュラムの検討という名前のこの研究会は、多くの英語学科、さらには英文学科の先生たち、イスパニアやポルトガル、ドイツ語、ロシア語学科などの教員の参加がありました。これらの先生たちは最低1ヶ月に1回は研究の会合を開きました。

〈調査の特色〉

特色を一口で言えば、先生たちがひたすら他人の意見に耳を傾けようとしたことです。その他人も英語教育の専門家というよりは実際に英語を使う立場の人々です。英語教育の学術的な研究を集めて比較研究することも可能ですが、それでは当たり前の「研究」に終わってしまいます。そこで英語関係の出版物を発行する会社の社長や、英語テストの実施者、英語教材の販売に関わる人、あるいは英語塾の経営者や企業の中で社員に英語教育を行なう人たちが大学に来てくれました。彼らは率直に自分たちの置かれた立場や今後の見通し、社会の動向について語ったのです。

そして何よりもこの研究の大きな特徴は、1000人の上智大学の卒業生にアンケートを出し、英語教育についての意識調査を行なったことです。このような大掛かりな社会調査はおそらく前例がないはずです。800人近くの方が快く調査用紙に答を記入してくれましたが、その先輩たちはいわば体を張って実社会で英語と取り組んでおられます。彼らの提言や反応は、大学の教育のあり方に対しても貴重なものになりました。またそれは今後の上智大学の英語教育にも少なからず方向性を与えるものになるはずです。

〈アンケート回答者の性別、年齢分布〉

性別	人数	構成比
M	507	59.1
F	320	37.0
?	31	3.6

年齢層	20	30	40	50	60	70	80	90	?
人数	169	289	226	116	25	17	2	1	13
構成比	19.1	33.7	26.3	13.5	2.9	2.0	0.2	0.1	1.5

有効回答数：858

〈社会調査結果の概要〉

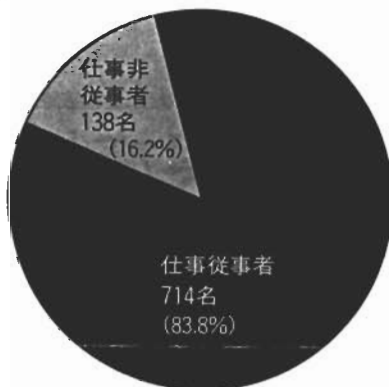
詳しいことは英語学科が発刊した報告書を参考にして頂ければよいので、ここではごく大ざっぱな概要の紹介にとどめます。まず解答者のうち84%の方々が、現在仕事に従事しています。その内、英語が仕事上で非常に必要と答えた人が36%、必要と答えた人が15%、やや必要と答えた人が18%になりました。(A) これを合計すると、上智大学の出身者は英語学科の出身でなくても、70%ほどの人が何らかの形で、仕事上、英語とお付き合いしていることになります。英語は仕事上、全く必要ないとした人は10%に過ぎませんでした。

よく私たちは上智大学出身者は学科に関係なく英語の能力が期待されるとか、やはり国際関係の仕事につきがちだなどと言いますが、これが数字で示されたわけです。その内、どんな場面でよく英語を使うかを聞いたところ、一番多いのが手紙や書類を読んだり書いたりすることでした。次に電話での対応、接待、会議、打合せなどが続きました。受付や窓口での対応という人は少なかったため、卒業生の英語使用の場面は文書のやり取りや会議など、相当本格的なものになっているようです。

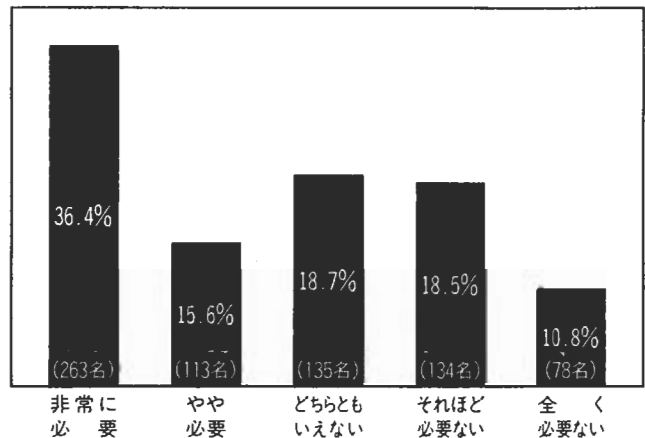
ではどんな時に英語を使いながら相手とのコミュニケーションがうまくいくかという点、相手の発音やアクセントがはっきりしているときという答えが圧倒的でした。さらにうまくコミュニケーションが成り立つために、一番大事だとされたのが、「話の内容について双方が興味を持っていたり関心がある」と、「内容について、予備知識がある」という点でした。英会話は中身が勝負だとよく言われますが、それが社会に出た方々の口からも言われているわけです。



現在の仕事と英語



仕事における必要度



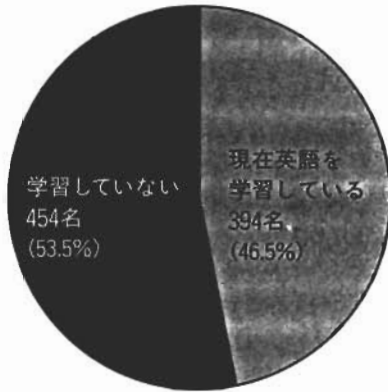
さらに46%の卒業生が今でも英語の勉強をしています。(B) 社会人になってからも半数近くの方が英語の学習を続けていることは驚くべきことですが、社会における英語の重要性がいかに大きなものであるかがわかります。なぜ英語をやっているのかという質問に対しては、「現在の仕事に必要だから」という答が圧倒的で、続いて「より円滑なコミュニケーションができるようになりたい」とありました。必要に駆られての英語という姿がここから浮かびます。

ではそのようにぎりぎりのところで英語を必要としている人たちに対しては大学時代の英語教育は役に立ったのでしょうか。13%が非常に役立ったといい、22%がまあまあ、28%がどちらでもないとしています。(C) 役に立った理由としては、基礎的な会話力が身に付いた、外国人に慣れた、簡単なことが言えるようになった……などがあげられています。反対に役に立たなかった理由は、特に私たちにとって興味深いのですが、練習量が少なすぎた(337人)、クラスの人数が多すぎた(292人)、会話の練習がなかった(275人)、授業数が少なすぎた(266人)、英語での論議の仕方を教えなかった(250人)、教材がつまらなかった(235人)等がありました。

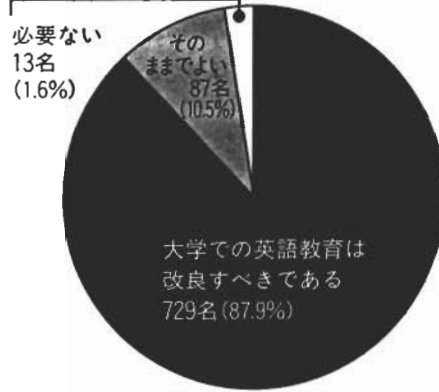
大学の英語教育に関しては、改善すべきだと考えている人が88%に達しており(D)、これは無視することのできない数字です。もっとコミュニケーションを中心とした授業を開発し、授業の目的を明確に定め、クラスの人数を少なめに抑さえ、自分のレベルに合ったクラスの選択制度を導入し、一方通行の授業を改め、たっぷり時間をかけて学生に興味のあることをやらなければならないようです。

B

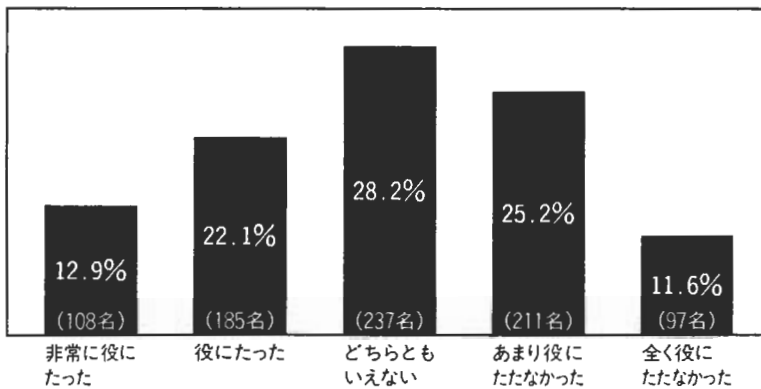
現在の英語学習

**D**

大学での英語教育

**C**

大学時代の英語は



〈これからの課題〉

ここにあげられていることだけを実行するにしても相当の費用がかかり、かつ大胆な改革を必要とします。卒業生の声は、はからずもカリキュラムの大幅な改善を要請しているように聞こえます。この社会調査にあたった私たちも、思わず襟を正して次のようなことを考えてしまいました。クラスのサイズは小さくしたい。授業目的を明快にして選択制にしたい。学生を学力別に分けて授業を行わないたい。単なる英語技術だけではない内容の伴った授業を展開したい、などなど。

さらに手紙や文書のやり取りが社会で最も必要ならば、そのような要求に見合う授業が考えられないか。他にも電話の対応や会議での討論等、大学としての立場と、具体的な社会人の必要性をどの辺で統合すべきなのか。あるいは大学という存在が英語に必要な技術を全部供給すべきか否か。果てしない疑問に取りつかれているのです。

冒頭に述べたように、世界は大きく変わろうとしています。かつては英語が喋れるだけで素晴らしいとされた時代がありました。西歐的なものがより進んだものに見えていました。しかし今はそんな時代ではなく、英語は喋れて当たり前。発音はアングロサクソン風でなくとも、「国連英語」でも構わないという時代です。このような時代に今までと全く異なった英語教育のあり方が求められても、当然のことなのかもしれません。

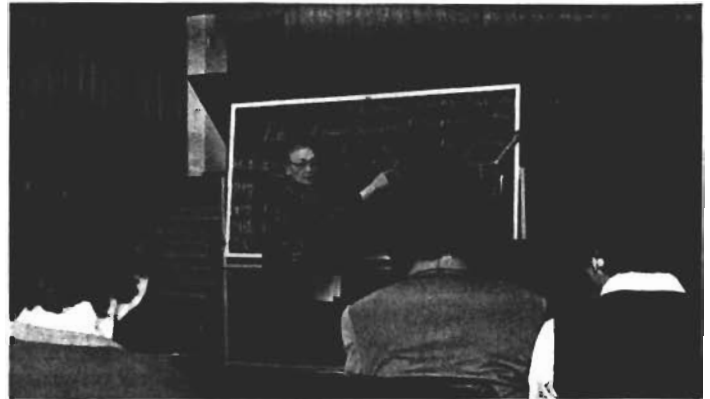
この文章に触れられる皆さんは、英語学科という名前の学科を卒業なさいました。従って英語学科の私たちの悩みや疑問は、ある程度まであなたの疑問でもあるはずですが。英語が話せるだけでは意味のない時代にどう生きていくのか。技術よりも中身が問われる時代に、英語の専門家のレーゾンデートルをどうやってアピールしていくのか。こうした疑問は、大学冬の時代の生き方にも絡んでくるのですが、機会を見つけてあなたの御意見も聞かせて頂ければ幸いです。社会調査について、今、解読の作業が始まったばかりですが、あなたの体験に裏打ちされた知恵もまた大いに役立つはずで。

『10年目の女性セミナー』

女性セミナー会員 鈴木禮子 (昭和41年卒)

SELDAAの発足と同時に歩み始めた女性セミナーも、今秋で10年を迎えます。生きた言葉としての英語を学び直しながら、それぞれが何か自分に必要、かつ大切なものを見つけることを目的に、現在約60名(毎回30名前後が参加)の会員が毎月楽しみに続けております。講師は上智の先生方を中心に外部からもお願いしています。昨年は、現在紛争の絶えない第三世界の国々の現状や、現地でのボランティア活動のお話を聞いて、平和な国にすむ私たちが何をすればよいかを考えました。また身近なことでは、カウンセリングの専門家から子育てが終わっての生活で起こるストレスの問題や、その上手な和らげ方を学びました。

今秋には講師の方々をお招きして10周年記念のパーティーを予定しておりますので、皆様奮ってご参加ください。



- 日時 原則として毎月第4水曜日 午前10:30~12:00
- 場所 かつらぎ館地下ホール
- 会費 3,000円/年
- 連絡先 世話人 41年卒 鈴木禮子 3321-3378
会計 43年卒 吉田知子 3332-1840

SELDAAより、募集とお知らせ

- SELDAAでは卒業生の方より、この会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、なんでも結構です。原稿に写真を添えてお送りください。
- OB、OGIによる趣味のサークルメンバーを募ります。グルメの会、ハイキングの会など、現在活動しているものから、これから設立を考えているものまで、何かございましたらご一報ください。
- この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。私たちと一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡お待ちしております。

上記に関するご応募・お問い合わせは、お気軽にどうぞ。

連絡先 英語学科事務室 TEL.03-3238-3719 本田由美まで

会費お支払いのお願い

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費で運営されています。事務局一同は、より一層の活動内容の充実と拡大を図ってゆく所存です。同窓会の円滑な運営のため、まだ会費の未納の方は、同封の振替用紙で最寄りの郵便局または銀行より是非お支払いいただくようお願い致します。その際、卒業年度を記入してください。卒業年がありませんと、帳簿記入の事務処理がはかどりません。

尚、今まで一度も会費をお支払いいただいていない方は、入会金も併せてお支払い願います。

入会金：1,000円

年会費：2,000円(できれば3年分まとめて)

＜会費お支払い状況＞

封筒に貼付してある宛名ラベルの右上部をご覧ください。

朱書きの数字は、'94年度以降その年度分までの会費が支払われている、

数字の後に(1/2)とあるのは、その年度は年会費の1/2(1,000円のみ)が支払われている、

朱書きで"入."とあれば、入会金は支払われているが、'94年度分の会費が支払われていない、

「朱書きのない」のは、今まで一度も入会金も会費も支払われていないことを、それぞれ表しています。

事務局長